

『源氏物語』 「宇治十帖」 論

—— 「香」 から見る人物造型 ——

丹 野 美 紀

一、はじめに

光隠れたまひにし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり。

（匂兵部卿・⑤——一七頁）

幻巻において、『源氏物語』は主人公光源氏の死という区切りを迎え、光源氏亡き後の人々が描かれる「匂宮三帖」そして「宇治十帖」へと舞台を移すこととなる。しかし、続編と呼ばれるこの十三帖には、正編の光源氏のような他の追隨をゆるさない、超越性を持ち合わせた主人公は存在しない。前掲「匂兵部卿」巻冒頭の一節に記された通り、この物語は光源氏という「光」無き後の「闇」の世界として描かれた物語である。とりわけ「宇治十帖」の主人公格となる、光源氏の血を継いだ薫中将と匂兵部卿は、それぞれ世間の人々よりもみごとな気品があり、優美であると称されるものの、語り手は、

いとまばゆき際にはおはせざるべし。

（匂兵部卿・⑤——一七頁）

と、光源氏には及ばない、彼の「光」を継ぐお人はいらっしゃらない、と二人を評している。

だが、二人の貴公子には光源氏とはまた違った個性である「香」が備わっており、薫には生まれつき「この世の匂ひならず」のような天性の芳香を身に纏っていることが冒頭で明らかにされている。はつきりと明確にこの香であるとかかるような描写は本文中には存在しないが、仏身を思わせるようなその芳香と称されるそれは、かえって薫の他とは一線を画した個性を現しているように思われる。また、もう一人の主人公格である匂宮は薫に對抗してあらゆる香を焚きしめるようになり、世間は二人を「匂う兵部卿宮、薫る中将」と称することとなる。藤田加代氏によれば、光源氏や薫達を通称する「ひかる」「かかやく」「にほふ」「かをる」といった動詞が人物の通称として用いられた例は先行文学に見られず、上代や中古の物語において主人公達の通称が即物的であったり、文中の一つの動作、作用に即したものであったのに対し、『源氏物語』の通称は非常に象徴的かつ高度な美意識によつてなされた、人物造型を体した表現であるとされている¹⁾。

このように、光源氏の栄華が過ぎ去った物語の中で、「香」は単なる臭いとしてだけでなく、二人の人物像の中でも最も強い個性としての役割を担わされていることが、物語の随所で見受けられる。何故、光源氏の血を継ぐ次世代の主人公としての二人に付与されたものが「香」であるのか。私はこの「香」という個性は、『宇治十帖』における大きなテーマの一つであると捉え、本稿で考察していきたいと思う。

古来、西域の民族の女性には体にえもいわれぬ匂いを纏った「挙体芳香」という体質の人物が存在した。楊貴妃や西施、また、生まれ持った体質ではないが、薔薇の香油や薔薇を浮かべた風呂で体に香りを染みこませ、常に良い芳香を漂わせていたというクレオパトラなど、『源氏物語』以前より、その人の魅力を演出するものの一つとして、「香り」は非常に重要なファクターとしてあった。『宇治十帖』の世界では、主に二人の新たな主人公のもっとも重要な美質として「香り」が挙げられるが、特に薫に関して具体的な「香り」の実体は物語の中では明かされていない。本稿では薫の「香り」に対してより明確なイメージを見いだすために、以下考察していく。

二、薫の「香」の特色について

香のかうばしさぞ、この世の匂ひならず、あやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩の外も薫りぬべき心地しける。
(匂兵部卿・⑤—二六頁)

右の本文の傍線部から、薫の纏う香りはこの世の匂いとは思われず、百歩先からも匂うような香りであると評され、その生まれ持った天性の芳香は、大雑把に言えば薫の体臭とも呼べる。前述の「挙体芳香」にも通ずるものがあり、具体的な香りの種類としては言及されてはいないものの、多くの先行研究では薫の香りについて、主に仏教との関わりから論じているものが多い。「匂兵部卿」巻では、

いかなりけることにかは。何の契りにて、かう安からぬ思ひそたる身にしもなり出でけん。善功太子のわが身に問ひけん悟りをも得てしがな。
(匂兵部卿・⑤—二三頁)

げに、さるべくて、いとこの世の人とはつくり出でざりける、仮に宿れるかとも見ゆることそひたまへり。

(匂兵部卿・⑤—二六頁)

と、傍線部のように、薫が自分を釈尊（善功太子）になぞらえて自身の出生について考えたり、薫をまるで仏菩薩がかりそめに人の姿をとって地上に宿ったのではないかと喩えたり、仏教的な理想像としての薫を描こうという意図が感じられる。この薫の神仏性と香りについては、次の場面が挙げられる。

寄りゐたまへりつる真木柱も褥も、なごり匂へる移り香、言へばいとことさらめきたるまでありがたし。…(中

略)：「経などを讀みて、功德のすぐれたることあめるにも、香のかうばしきをやむごとなきことに、仏のたまひおきけるもことわりなりや。薬王品などにとりわきてのたまへる牛頭栴檀とかや、おどろおどろしきものの名なれど、まづかの殿の近くふるまひたまへば、仏はまことしたまひけりとこそおぼゆれ。幼くおはしけるより、行ひもいみじくしたまひければよ」

(東屋・⑥—五四—五五頁)

薫が寄りかかっていた真木柱から香る移り香を、女房達は口々に、「何はともあれあの殿が近くでお動きになると、仏はなんと正直でいらつしやることかと思わないではいられません」「前世の功德がどんなであられたのか知りたくなるような御様子でいらつしやいますね」などと評している。その人となりもあれど、その移り香から「前世の功德がどんなであったか」とまで言われることから、薫の芳香は仏を思わせる香りであるという点は注意しておくべきだろう。

『法華経』の説くところを受持したり、読誦したり、教えたり、書写したりする者は、視覚の八百の優れた性質、聴覚の千二百の優れた性質、嗅覚の八百の優れた性質、味覚の千二百の優れた性質、皮膚感覚の八百の優れた性質、^性このころの千二百の優れた性質を得ることができる。(五一頁)

右の引用は、『法華経』が督励する「実践」を行うことによつて、超越的な感覚器官を得ることができることを概略した、松濤誠達氏による説明である。『法華経』の教えを実践した者はより優れた鋭敏な感覚を手に入れることができ、嗅覚に限って言えば、このような実践を行うものの嗅覚は清らかで、宇宙にある様々な香りを嗅ぎ分けられるとまで言われる。仏教における救済者である仏陀は、常に嗅覚ないし「芳香」との関わりがあると、松濤氏は述べた上で、次のように言う。

仏陀や菩薩のような仏教徒にとつての理想的な偉大な人物は、三二種の明瞭な身体的特徴(三十二相)をもつとき

れ、更にこれ以外の八〇種の副次的特徴（八十種好、八十隨形好）をもつともされる。…（中略）…八〇種の副次的特徴の中に、「首髮香馥」と漢訳されるものがある。…（中略）…仏陀や菩薩は「芳香のする頭髪を持つている」ということになる。芳香といつても具体的にいかなる「香り」を指すのかは特定できない。^{註3}（五三〜五四頁）

右の説明から、具体的に如何なる香かは特定できないが、仏陀や菩薩は頭皮の芳香、つまり体臭が備わっていることが分かる。また、松濤氏は、經典の中で香や花を持つて釈尊を尊敬し、敬礼する乞食達の逸話から、釈尊に対しての意思表示には「香」と「花」が不可欠であり、聖者としての釈尊は常に芳香ないし、花との関わりを持つて述べている。「宇治十帖」でも、薫は花の香りと共に登場する場面が非常に多い。なかでも、度々「闇はあやなし」と喩えられるように、^{註4}闇の世界の主人公の象徴としてこの和歌的表現をベースに語られていることから、薫の体臭は花の香、ひいては梅の香であるとする説もある。しかし、「この世の匂ひならない」香りを安直に梅の香りと結びつけるのには些か疑問を感じる。また、薫の神仏性を表現する体臭が、仏教との関わりから花の香りに似通ったものであろうことは間違いないと考えるが、薫の香りが最も強く現れるのは女性との関わりを持った場面であるということに留意しなければならぬ。

① あやしく、かうばしく匂ふ風の吹きつるを、思ひがけぬほどなれば、おどろかざりける心おそさよと、心もまどひて恥ぢおはさうず。
（橋姫・⑤—一四—頁）

② かの人のお移り香のいと深くしみたまへるが、世の常の香の香に入れたきしめたるにも似ずしるき匂ひなるを、その道の人にしおはすれば、あやしと咎め出でたまひて、いかなりしことぞと気色とりたまふに、

（宿木・⑤—四三四〜四三五頁）

③ うち払ひたまへる追風、いとかたはなるまで東国の里人も驚きぬべし。

(東屋・⑥—九一頁)

右は、それぞれ大君、中君、浮舟との場面からの抜粋である。薫の匂いについては、「不思議なほどかぐわしい」(傍線部①)、「女君の御衣にまことに深く染みついているのが」(傍線部②)、「まったく異常なまでに強くにおう」(傍線部③)と表現されており、明らかに他の場面よりも際立つて薫の体臭が強調されていることがわかる。

そもそも、玉鬘邸への訪問など、女性と関わる場面における香りの描写が薫には非常に多い。薫の体臭は欲望を感じる時、つまりは性欲を感じた時により強い体臭が発現しているのだ。このことに関して、男性の体臭について、高島靖弘氏は、

体臭に関する香りの成分は、アンモニアや低級脂肪酸類は以前からよく報告されています。特異的なものとして、ステロイド物質の類縁のものでアンドロステノールとかアンドロステノンというものがあります。男性が欲望を感じる年頃になると男性ホルモンの活動が盛んになると、強い体臭がしてきます。^{注5}

(三四頁)

と解説している。右によるとアンドロステノールはトリュフにも含まれており、アンドロステノール0.1%の溶液からは白檀と麝香をミックスしたような香りがあり、同じ匂いは数ヶ月残るだろうとされている。男性ホルモンの活動が盛んになるとこれらの成分が分泌され、体臭が強くなる。高島氏は近年の生理心理的研究の結果から、女性に対しては覚醒(興奮)効果があり、男性には鎮静効果があることを明らかにしている。薫の匂いは、夜に風に乗って人々の元へ届き、その芳香は人々を覚醒させ驚かせる。

隠れなき御匂ひぞ、風に従ひて、主知らぬ香とおどろく寢覚めの家々ありける。

(橋姫・⑤—一三六頁)

これらの点から薫の芳香は強い体臭であり、フェロモン的一种であるとも考えられる。また、アンドロステノールの例えとして挙げられている白檀と麝香は、『大安寺伽藍縁起流記資財帳』によると、沈香、浅香、薰陸、丁子、衣香、百和香などと一緒に宮廷から仏寺に献納された記録があるとされている。これらの香木の多くは、元々梵語の名称で仏教の経典にも載せられている。さらにこの二種類は、この時代の薫物として用いられた代表的な香、「六種の薫物」にも用いられている。尾崎左永子氏の著書から、その一つ、「梅花」の調合についての解説を抜粋する。

「梅花」——梅の花の香に似せたもので、沈、占唐、甲香、甘松、白檀、丁子、麝香、薰陸を合せる。後世には梅の麝注7を入れたりすることもあった。花の香。
(一一二頁)

つまり、麝香や白檀の香りは、他の香との兼ね合いや程度によつて梅の香りに近い匂いを発しているという事になる。この二つの香は、神仏性を持った香の要素であると同時に、男性の魅力を引き出すフェロモンとしての役割も兼ねているのである。推測の域を出ないが、男性フェロモン、この時代では麝香や白檀に近い香りを、作者は無意識にでも感じ取っていたのではないだろうか。

私はこれらの論を総合し、薫の体臭は「梅花」に近い香なのではないかと仮定する。仏の道を志す精神やその人柄を表す神仏性と、捨てきれない俗世——つまり女性への未練を断ち切れない非常に人間らしい欲望を併せ持っている薫の二面性を、「闇はあやなし」という表現を下敷きに、女君との場面によつて、また経典からの引用によつて、「香」で表現しているのではないだろうか。

三、匂宮の「香」の特色について

かく、あやしきまで人の咎むる香にしみたまへるを、兵部卿宮なん他事よりもいどましく思ひて、それは、わざと

よろづのすぐれたるうつしをしめたまひ、朝夕のことわざに合はせいとなみ、御前の前裁にも、春は梅の花園をながめたまひ、秋は世の人のめづる女郎花、小牡鹿の妻にすめる萩の露にもをさをさ御心移したまはず、老を忘るる菊に、おとろへゆく藤袴、ものげなきわれもかうなどは、いとすさまじき霜枯れのころほひまで思し棄てずなどわざとめきて、香にめづる思ひをなん立てて好ましうおはしける。

(句兵部卿・⑤—二七—二八頁)

薫に対抗意識を燃やす匂宮は、薫に備わった芳香に特に執心して、ありとあらゆる優れた香を焚きしめていた。わざとらしく香りのよい花に執着したり、明けても暮れても調査にかかりきりという有様を作者は「風流がつている」と評している。匂宮は「にほふ」美しさの代表的人物として「宇治十帖」では描かれている。「にほふ」は元々は視覚的な美を指す言葉でもある。あくまで匂宮の香りは人工的なものに過ぎず、物語の中でも匂宮の香りは単に「にほふ」だけであり、この世に二つとない不思議な体臭を持った薫とは全く別物であると言えよう。薫の香は彼の二面性を代弁するものであり、普段抑圧されている薫の欲求が強くあらわれたときに発せられる。これは薫の香が体臭であることも前提の一つであり、薫の香が肉体と精神の繋がりによってもたらされる為である。

匂宮の香りは人工的に作られた「香」であるため、湿度や時間帯でより強く匂いが漂うことはあっても、匂宮が欲求をあらわにしたとき、よりその香りが強くなる——と言ったことは起りえない。私は「きよら」美を受け継ぐ匂宮において、「香」そのものは彼の美質のあくまで一部に過ぎないと考える。彼の社交的で色好みな人柄や、光源氏の血を継いだ容貌の美しさを、より効果的に彩るための「香」なのだ。そのためか、薫の体臭に関してはある程度語られていても、匂宮の香がどういったものなのか、具体的な描写は一切と言つてよいほど見受けられない。「にほふ」人物としての匂宮に関して、藤田加代氏は以下のように述べている。

「にほふ」人物そのものに造型上の新しさがあるわけではない。しかるに、源氏物語の主要人物たちがそれぞれ一要素として持っている「にほふ」美を典型化し、「にほふ」人物として「かをる」主人公に対比させるとき、その

造型が鮮やかな映像性を獲得するのである。「にほふ」のもつ「明るく華やかな美質があたり一面に発散し、華麗な雰囲気をつくること」の意が、宇治の物語において、勾宮の思うがままの抑制のなさ、衝動的な感情表出、燃焼する恋情等々を象徴的に表現し、懷疑的で退嬰的な薫の生き方と見事な対比をみせるのである。^{注8}（二二五頁）

薫と勾宮の対比が、物語における重要なファクターとして描かれていることは、最早言うまでもないが、「香」そのものに関してはどうだろうか。前述の通り、薫に比べて「香」だけに比重を置いて描かれている訳ではない勾宮は、具体的にどういった「香」であるのか、物語の描写だけでは判断できない。そこで、第二節で述べた薫の「香」を軸として、勾宮の「香」について考察していきたい。

対照的な二人として描かれる薫と勾宮だが、「香」に関しては勾宮と薫の「模倣」という点に注目したいと考える。先行研究では、二人の同性愛的な欲望の有無に関する論が少なくない。松井健児氏は、神田龍身氏の提唱する分身論^{注9}を引用して、「薫と勾宮は同じ女性に好意が向っているというより、実は無意識のうちに互いの欲望を模倣し合っているにすぎない」（七頁）と述べており、それに対して橋本治氏は反論している。^{注10}源氏研究では、一人の女性を共有するという形ではなく、独占するもそれが互いの欲望を模倣することで成り立っている形が「宇治十帖」における薫と勾宮の同性愛の形であると考えられている。また、神田氏は、互いの欲望を模倣し合う二人の主体と対象との恋愛関係が成立するためには、「媒体」「媒介」なる第三項の存在が必須であると言い、次のように述べている。

この隠れた第三項こそが、人間関係成立の鍵をにぎっていることを言いたいのである。その証拠に、薫には勾宮（媒体）が、勾宮には薫（媒体）なくしては、宇治の女たちを恋することはなかった。…（中略）…媒体ということから、ルネ・ジラルルの有名な「欲望の三角形」「欲望の模倣」理論が自ずと想起されるだろう。…（中略）…すなわち、勾宮の欲望なくして薫の恋はなく、薫が欲望しているとみえたからこそ勾宮もこの恋に賭けたのであり、薫の欲望が勾宮により惹起されたものならば、それに刺激された勾宮の恋も所詮幻想であるに相違なく、女たちの

実体を度外視したところで互いが互いの欲望を相乗的に模倣しあっている、と。^{註11}

(二〇～二二頁)

同性愛問題はさて置き、この模倣衝動については同意しうる点がある。匂宮は薫を「他事よりもいどましく」思い、特に香について非常に熱心である点は、匂宮から薫への強い模倣衝動の表れだろう。また、彼らは頭中将と光源氏のように、違う女性がいて、その中で同じ女性を共有するという事はない。同じ女性を奪い合い、独占しようとするのである。これはお互いが共有することを拒否し、模倣し合い独占しようとする衝動であると解釈できるのではないだろうか。

よって、「香」に関しても、匂宮は薫に対して羨望、それが模倣衝動に繋がった可能性があると私は考える。「香」に造詣の深い身分の高い人物は、二人の「香」の違いに理解を示していたが、浮舟を始め身分の低い人々に違いが判らなかつた原因の一旦は、「香」の相似性にあるのではないだろうか。

いと細やかになよなよと装束きて、香のかうばしきことも劣らず。…(中略)…はじめよりあらぬ人と知りたれば、いか言ふかひもあるべきを、夢の心地するに、やうやう、そのをりのつらかりし、年月ごろ思ひわたるさまのたまふに、この宮と知りぬ。^①

(浮舟・⑥—一二四～一二五頁)

右の本文の傍線部②の時点で、浮舟は全て終わつた後に匂宮だと気づいたとする説もあるが、私は暗闇の中で「香」の判別がつかなくなつたとしても、その他の身体的特徴で十分二人の判別は可能なのではないかと考えているが、今は省略に従う。つまり、浮舟は薫の「香」を既に認識しており、その上で二人を「香」の違いだけで判別するには至らなかつたのではないかということである。この点について吉村研一氏は、「その認識していた匂いと匂宮の香が同じであつたからこそ、浮舟は薫と取り違えたのである」(二〇四頁)と解釈しており、確かに二人の匂いに似た点があつたことは間違いないとしている。しかし、薫の「香」は生まれ持った芳香であり、匂宮の「香」はあくまで人工的に作り出されたものである為、似て非なる香りであつたことは確かであろう。前述の通り、「香」に理解のある人物はその違いに気

付いていることも証拠の一つである。

つまり、匂宮の「香」もまた、梅の香りに近いものであると言えるのではないかと考える。ただし、神仏性を伴った薫の「香」とは全く異なるものであることは明らかであり、第二節で挙げた梅花の香ではなく、より自然の梅に近いものとする。また、ここで注目したいのは、「紅梅」巻の以下の場面である。

「園に匂へる紅の、色にとられて香なん白き梅には劣れると言ふめるを、いとかしこくとり並べても咲きけるかな」とて、御心とどめたまふ花なれば、かひありてもてはやしたまふ。

(紅梅・⑤—五〇〜五一頁)

匂宮は、紅梅は基本的に色に勝り、香りは白梅に劣っているが、この園に咲く梅は見事にその二つを兼ね備えていると評している。かつて紫上から二条院と共に庭園の紅梅を受け継いだ匂宮にとつて、梅の花は大変思い入れの深いものであることは間違いない。「紅梅」巻はその名の通り、紅梅の花を巡って語られる巻であり、ここで匂宮が紅梅と白梅を引き合いに出したことに何の意図もないとは考えられない。私はその「香」のモチーフに照らして、匂宮は紅梅、薫は白梅という意図があつて描かれた場面なのではないかと考える。色に勝る「にほひ」と、香りに勝る「かをり」と言うように、二人の「香」は同じく梅をモチーフとしたものであり、その中には確かに正編から受け継がれる美質が息づいている。

四、光源氏から受け継がれる主人公像

薫と匂宮は光源氏の「光と影」を映す存在である、と先行研究では二人の主人公を指してそう呼ばれることがある。自由闊達で情熱的な匂宮と、道心深くどこか陰のある薫は、確かに光と影のような存在とも言えよう。これまでは美的表現における「かをる」「にほふ」を鍵語に、具体的な芳香の考察から二人を論じてきたが、本節では正編から連なる

光源氏の主人公像、「光と影」について言及していく。

光源氏は、「宇治十帖」の世界の中では、唯一無二の存在としてその姿が描かれており、正編での葛藤やすれ違いといった人間味のある光源氏像はおよそ無いに等しく、調和と円満といった人々の理想像を反映して語られる。このような美化された人物像は、薫や匂宮を対比し、更に光源氏と比較して「完璧ではない主人公」として描くための理想化という面が強まったためと考えられる。私は、何故続編の主人公という役割が光源氏から分割される形で作られたのかという点について、正編の流れを汲みながらも、完成された主人公像を二分させることで、あくまで「光亡き後の世界」を強調すると同時に、また「理想的」ではない、現実の等身大の主人公を造型するという目論見があったのではないかと考える。正編の軸である「ひかる」「かかやく」美しさが、『源氏物語』以前から存在する伝統的な美意識からもたらされたものであり、そのような神霊性を持ち合わせた美しさを持つ人物は、主人公や皇族の血を引く人物のみに限られる。これは物語の主人公が、その世界の中で絶対的な理想であるという役割を持つていたためとは考えられないだろう。これまでの物語では、主人公は他の人物にあらゆる面で勝る理想の存在であり、光源氏も死後、「宇治十帖」の世界の中では同じくあらゆる場面で他の基準、理想の主人公となる。

では、光源氏から受け継がれる主人公像、すなわち「光と影」とは一体何を指すのか。結論的に言えば、私はこれを感情と理性、ないしは本能ではないかと考えている。まずは「光」の面について考察を進める。

女は、また、大將殿を、いときよげに、またかかる人あらむやと見しかど、こまやかににほひ、きよらなることは
こよなくおほしけりと見る。
(浮舟・⑥—一二三頁)

二人を回想する場面で、浮舟は薫を「きよげ」、匂宮を「きよら」と評している点に注目したい。「きよら」が「ひかり」「かかやく」と同じように皇族の血を引く人物、とりわけ『源氏物語』では、光源氏の系譜に連なる人物に限定して使用される美質であることは既に述べられている。これが薫へと受け継がれている人物造型との大きな違いであるこ

とは間違いない。薫はその容姿も匂宮と同様の評価を周囲から受けているが、匂宮とは違い、光源氏の血を直接継ぐ人物ではなく、「きよら」なる人物ではない。浮舟は薫を装った匂宮と関係を持つてからというもの、今の今まで「薫のような素晴らしい方が他におられるだろうか」と思っていたのに、「宮の情こまかに美しく気高いのは段違いでいらつしやる」と感じ始め、やがて二人の間で感情が揺れ始めることとなる。薫は道心深く、優しく生真面目であり、母の北の方も浮舟が薫と結婚することを望んでいた。

対して匂宮は、既に正妻の六の君、浮舟の異母姉妹である中の君を妻に迎えており、世話になった中の君の立場やいっつ心変わりされるかわからない自分の立場を鑑みても、匂宮はふさわしからぬ相手である。しかし、それとは裏腹に、浮舟は薫にはない情熱的な面を持った匂宮に惹かれてしまう。物語の中で匂宮や薫のどこが光源氏に似ていると言及されている表現は勿論ないが、唯一その「きよら」は、匂宮が光源氏の血を継いだ人物であることを明確に示しているものである。光源氏の外の面、恋愛に対する情熱や欲望、風流好みな面、そしてその「ひかり」「かかやく」と同等な美質が、匂宮が受け継いだ光の面であるとするれば、この「きよら」という表現はそれを暗示したものでないだろうか。浮舟が理性で薫に惹かれるのと同時に、感情では匂宮に傾いてしまうのは、匂宮が「きよら」なる人物であることに他ならないからなのである。

一方で、浮舟は現実的に薫を選んだ方が良いことを頭で理解し、薫にも惹かれているには違いない。浮舟が惹かれる薫像が、匂宮と同じく光源氏から受け継いだ影の面であるからこそ、浮舟はどちらか一方を選べないのである。薫が匂宮と違い光源氏の血を受け継いでいないため、その容貌は「きよげ」であり、「きよら」なる美しさには一段劣るものである。だが、薫は光源氏と同じく「この世のものとはおもわれない」美質の持ち主である。

心にまかせて身をやすくもふるまはれず、いとむくつけきまで人のおどろく匂ひを失ひてばやと思へど、ところせき人の御移り香にて、えも濯ぎ棄てぬぞ、あまりなるや。

（橋姫・⑤——一五二頁）

例ならず人のささめきしけしきもあやしとこの宮は思しつゝ寝たまへるに、かくておはしたればうれしくて、御衣ひき着せてまつりたまふに、ところせき御移り香の紛るべくもあらずくゆりかをる心地すれば、宿直人がもてあつかひけむ思ひあはせられて、まことなるべしといとほしくて、寝ぬるやうにてもものたまはず。

(総角・⑤—二四—頁)

生まれつき備わった「かをる」と人工的な「にほふ」との大きな違いとして、本文傍線部の移り香に関する記述が挙げられる。薫の移り香は柱や袖など至る所に残るが、匂宮の香は移り香を残さない。「この世のものとはおもわれない」芳香は、人工的な香とは異なるものである。右の例や「宿木」巻のように、「かをる」美質は物語の中でマイナスの要素として働く場面が多く、誤解を生むことも少なくない。これは第二節で述べたように、薫の欲望に反応して体臭が発せられるためである。光源氏が仏道に心惹かれながらも、欲望や執着を捨てきれずに苦悩していた内の面、影の面を薫は受け継いでいる。

しかし、匂宮と薫の人物造型において、光源氏から受け継いだ面だけが全てではない。あくまで続編では、理想とされる光源氏の主人公像を二分することで、この物語は光源氏の人物像を受け継ぎ新たな美質を軸とする、完璧ではない等身大のよりリアルな主人公像を作ろうとしたのではないだろうか。

五、おわりに

本稿では薫と匂宮の具体的な香の在り方を論じ、二人が光源氏から受け継ぐ主人公像について考察した。その中で、「匂宮が紅梅、薫が白梅」であるという仮説を立てたが、この共通する梅のモチーフの源について、最後に触れておきたい。梅は『源氏物語』の中でも随所に見られる花であるが、梅と言えばやはり紅梅を愛で、二条東院の邸と共に匂宮に託した紫上が想起させられる。

春の殿の御前、とりわきて、梅の香も御簾の内の匂ひに吹き紛ひて、生ける仏の御国とおぼゆ。

(初音・③—一四三頁)

六条院の春の町には紫上の好みで紅梅が植えられており、衣配りの時と同様、作中でも度々紫上というと「赤」が強調されている。これに対してか、光源氏は女三宮に後朝の手紙に白梅を添えて贈っている。

ことに恥づかしげもなき御さまなれど、御筆などひきつくるひて、白き紙に、

中道をへだつるほどはなけれども心みだるるけさのあは雪

梅につけたまへり。

(若菜下・④—七一頁)

また「若菜下」巻では、正月の一九日、白梅の咲く六条院の女樂で琴を演奏する女三宮が描かれている。これに関して川島絹江氏は、「二条院の紅梅—紫上 六条院の白梅—女三宮」という対比があるとしている^{註13}。川島氏は、六条院の春を待つ梅は白梅の方がふさわしいとしており、何故二条院の紅梅なのかという理由としては、おそらく「幻」巻での紫上亡き後、二条東院の紅梅を見て紫上を回顧する匂宮と光源氏の印象からであると考えられる。

二月になれば、花の木どもの盛りになるも、まだしきも、梢をかしう霞みわたれるに、かの御形見の紅梅^①に鶯のはなやかに鳴き出でたれば、立ち出でて御覧す。

(幻・④—五二八頁)

例の、宮たち上達部など、あまた参りたまへり。梅の花のわづかに気色^②ばみはじめてをかしきを、御遊びなどもありぬべけれど、なほ今年までは物の音もむせびぬべき心地したまへば、時によりたるもの、うち誦じなどばかりぞ

せさせたまふ。

(幻・④—五四九頁)

この後も「幻」巻では紅梅が度々登場し、紫上を回顧させる要因となっている。また、「幻」巻は①の紫上亡き後の二条院の紅梅から始まり、②の六条院の春を待つ白梅という形で物語が終わっている。このように正編では、紫上と紅梅、女三宮と白梅というように、使い分けられていることがわかる。またその梅のモチーフが正編から受け継がれていることは、続編の下敷きにもなっている「闇はあやなし」の表現から読み取る事ができる。これらのことから、梅のモチーフの源は、紅梅は紫上、白梅は女三宮であり、匂宮は紫上から、薫は女三宮から、それぞれの梅のイメージを引き継いでいると考えられる。

主人公としての造型を光源氏から受け継ぎ、その中核を成す「香」に関しては、更にそのモチーフとしてそれぞれ女君から受け継いだ梅をイメージすることで、作者は正編を引き継ぐと同時に、続編のテーマとして明確に「香」を据えようとしたのではないだろうか。

* 本稿における『源氏物語』本文の引用は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語①～⑥』（小学館刊）を用い、引用冊数と項数をカッコ内に記した。

注

- (1) 藤田加代『「にほふ」と「かをる」』（風間書房、一九八〇年）。
- (2) 松濤誠達「芳香あふれる国インド 精神の緊張と心身の癒し」（『香りの比較文化誌 東の「香」から西の「アロマセラピー」まで』北樹出版、二〇〇一年 所収）。
- (3) 前掲注（2）に同じ。

- (4) 「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる」(古今・春上・四一・躬恒)による。
- (5) 【座談会】高島靖弘+三田村雅子+河添房江「薫りの誘惑／薫りの文化」(三田村雅子・河添房江編『源氏物語をいま読み解く2』薫りの源氏物語 翰林書房、二〇〇八年 所収)における高島氏の発言。
- (6) 尾崎左永子『源氏の薫り』(求龍堂、一九八六年)。
- (7) 前掲注(6)に同じ。
- (8) 前掲注(1)に同じ。
- (9) 神田龍身『物語文学、その解体―『源氏物語』「宇治十帖」以降』(有精堂、一九九二年)。
- (10) 【座談会】橋本治+三田村雅子+河添房江+松井健児「王朝文化と性」(三田村雅子・河添房江・松井健児編『源氏研究 第1号』翰林書房、一九九六年 所収)における松井氏の発言及び橋本氏の発言。
- (11) 神田龍身『源氏物語Ⅱ性の迷宮へ』(講談社、二〇〇一年)。
- (12) 吉村研一「飽かざりし匂ひ」は薫なのか匂宮なのか―もうひとつの別の解釈―(前掲注(5)『薫りの源氏物語』所収)。
- (13) 川島絹江『源氏物語』の源泉と継承』(笠間書院、二〇〇九年)。